

血潮の跡ちしおあと

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

如来の興世にあひがたく

菩薩の勝法きくことも

善知識にあふことも

よくきくこともかたければ

一代諸教の信よりも

難中之難とときたまひ

聞信の一念に下々の凡夫が

不思議の他力の堂奥には入られない。助くる法は一乗究竟の極説であるから浄土には往

き易いけれども、助かる地獄はい出の機に熟未熟があるから即得往生する人は稀である。

逢い難い仏法に逢い、而も弘願の一乘法を聞きながら由なき自力の執心にはたされた

諸仏の経道ききがたし

無量劫にもまねらなり

をしうることもまたかたし

信ずることもなほかたし

弘願の信樂なほかたし

無過之難とのべたまふ

一朝夕は絶對

一乗究竟の極説であるから

即得往生する人は稀である。

由なき自力の執心にはたされた

なら、万劫にも浮かぶ瀬が無いのだからお互いに真剣で求めましょう。

理屈は易いが実際は難しい。道理は直に判るけれども体験の世界は一朝一夕では得られない。私も初めの程は墮ちる者をお助けと理屈が判り有難く成つたのを信仰とばかり思っていた。それを忘れないのが安心であると心得ていた。人様は何故にあんなに手間取つて苦しむのであろうかと不思議な様に思っていた。そして自分自身と言うものを念を押して考えた事が無く、ただ親様の仰せではないか、疑つて何にするかと心の秘密の蔵にちやんと錠を下ろして疑われないと言う錦を覆せていた。誰が何と言つたつて親様が其の儘来いよと仰せられるのだから之ほど確かな事はない。助けて貰う事に安心したのが信心ではないかと胸に納めていた。自分はすなおに安心は戴いている、何処を探して見ても疑いと言うやましい物は微塵ばかりも無いからお領解は戴いていると心得ていた。自分は俗人から僧侶にさして戴いた程因縁も深いし、学問もさして貰つてゐるから 悪趣には沈まないであろうと心から感謝していた。

こんな信仰を持ち合はされてゐるならば決して悪いと言うのではないが まだまだ進

むべき余地は充分有ると思う。泥田の水をコップに入れて澄んだ処ばかり見て喜んで
いる信仰であつて、臨終や逆縁に逢えば忽ち疑雲の巻き起る薄氷の様な信仰である
という事を知らないのである。自力疑心の千尋の谷底が脚下に在る事を知らないで空の高
きを眺めつつ歩んでいるのである。疑われないと言う型に執られて疑い抜いて疑い無く救
われたと言ふ自覚まで進み得ない人である。苦の無い人には樂は無。疑つた人でなけ
れば晴れた味は判らない。疑いの蓋を取つた積りで益々堅固に閉ざすのが自力の迷情で
ある。この心を見ない様にし、これが有つては往生の妨げに成るからと蓋をし、或は
自分の見苦しさを親様が御承知でお助けと誤魔化して真実らしく粧うているのであるが、
自分の魂の動きを見て恐れ、業煩惱の唸りを聞いて不安を抱く様な者は未だ如実に法を
聞いてはいない。機法一体、仏凡一体は死後の事ではなく、信樂開發の刹那に成就する
魂の大満足であるが、極悪最下の根機ならこそ極善最上の妙法が一体に働くのではない
か。機を見て恐れるのは法の真実が貫いていないからではないか。眞の光明の世界は法
を見てよし機を見てよし、散乱放逸の此の機に輝く妙法を見てこそ絶対の安住が得られ

るのではないか。

一口に他力他力と言えば易い様であるけれども、他力の真似をした他力と、他力に成つた他力、即ち他力の中の自力と、他力の中の他力とは、自力と他力の天地の違いがある。多くの同行は他力の言葉に誤魔化され他力に成る事を忘れてはいないか。他力至極の金剛心は、道理理屈だけ調子を合わして疑われない様にしてある。安っぽい領解とは違ふぞ。心得振りや安心のし振り、学問や智慧の間に合う様な絶対他力ではないぞ。見れば見る程、聞けば聞く程自分の不実、呆れ返り、箸にも棒にも掛からぬ、墮ちるも上がるも知り切らない、地獄と聞いても驚かず、極楽と聞いても求め切らない、自分で自分の心の判らない必墮無間の有りつたけを無条件で赦す不可称不可説不可思議の絶対他力の喚声を南無阿弥陀仏で聞いた時に獲らるのである。

今迄も私の様な悪い者と言つていた。極重の悪人は私一人と言つていたが、悪い者と口で言える間は余程高い処にいる悪い者で、決して地獄墮ちではない。法に照し尽くされた時、思うも言うも行ふも総てが、虚仮不実であり、現に五逆を犯しつつある悪魔

が自分自身であり、謗法闡提の叛逆の徒、獅子身中の虫こそ、姿を僧侶に粧うている私である。と驚かされ、口や意に尽くせぬ罪業、十方法界の悪を負うて泣いた法龍が十方法界を只で恵まれ煩惱菩提無二の境地が恵まれたのである。

嗚呼弘願他力の妙法は獲得し難い。弘誓の強縁は多生にも遇い難い。真実の淨信は億劫にも得難い。他力程獲難いものもなく、又、他力程獲易いものも無い。獲易いのみを知って獲難い事を知らない者は深刻でない。獲難いのみを知って獲易いを知らない者は他力ではない。

会々真劍に求めて命懸けで布教をしている人を見ると、「一犬虚を吠えて万犬実と伝う」の如く、自分には何の煩悶もなく、何等求道した覚えも無く、体験の妙味も更になく、只々説教本の喩話くらいを暗記して信仰を片付けていて、悪辣な手段を以て其人を陥れ、罵詈讕言をしてやれ異安心じゃ、地獄秘事じゃ、機歎きじゃと八方から攻撃しているけれども、本当の異安心を知っているだろうか。又正当な安心を心得ているだろうか。書物に書いて有るのは書いた人の安心であつて自身の安心ではない。書物の通りに

信しんずればよいかも知しれないがそれは真ま似ねであつて真しん実じつではない。文字もんじばかり読よまずに腹はらを讀よまねばならぬ。学がく解げを知しつたので往おう生じょうの解かい決けつが付つくのでなく真しん実じつの生せい命めいに触ふれなければならぬ。聖しょう人にん様さまが、

「然しかるに濁じよく世せの群ぐん萌もう穢え悪あくの含がん識しき乃まし九く十じゅう五ご種しゆの邪じゃ道どうを出いでて半はん満まん権こん実じつの法ほう門もんに入いると雖いも真しんなる者ものは甚はなだはな以もつて難かたく実じつなる者ものは甚はなだはな以もつて稀まれなり。偽ぎなる者ものは甚はなだはな以もつて多おほく虚こなる者ものは甚はなだはな以もつて滋しし」

と仰おほせられた様ように真しん心しん徹てつ到とうしている信しん者じやは国くにに一人ひとりか郡こおりに一人ひとりかと言いわゆる程ほど少すくいのである。人ひとの求もとめない処ところを求もとめている、聞きかない声こゑを聞きいている、言いわない事ことを言いつていゝ、それだけ深しん刻こくであり、それだけ自じ信しんが有あるのである。聞きき流ながしに聞きいている人ひと達たちが自分じぶんの信しん仰こうの動どう揺ようを防ふぐ為ために、異い安あん心しんくくと吠ほえるのは無む理りもない。その人ひとから見みれば安あん心しんが異ちがうのだから。而しかし違ちがうてこそ仕し合あせである。死しんでからの往おう生じょうを夢ゆめ見みる人ひとと、現在げんざいの一いつ刹せつ那なに救すくわれなければ永えい遠えんに救すくわれないと求もとめた者ものと同どう様ようであるべき筈はずがない。少しょう々の照てらされ方かたでは悪あく人にんが悪あく人にんと判わからず、一ひと通とおりの苦く勞らうでは間ま違ちがい者ものが間ま違ちがい者ものと

言う自覚は得られないのだから。

私は小さい時から仏縁が深かった。仏教大学に在学中でも、母一人の生血を吸うて僧侶に成る私は他の学生の真似をしてはならない、一日一日が真剣でなければならぬ、人様を導いて上げなければならぬ、人並の勉強では人並の者にも成れないと思つたら、特に宗学には全力を注いでいた。お経の意味もよく判り、お聖教の御心持も解せる様になり、仏祖の御恩、両親の恩、師長の御恩などを毎日毎夜合掌していた。その頃の信仰は「入信の道程」の初めの巻に詳細に述べて有る様に、親の手元を見、お聖教の文字を眺めて、自身の解決なんどは何時とはなしに疾くに出来上がっている様に考えて何時も教人信の方ばかりに走っていたのである。

お聖教に親しみつつ両三年も夢の様に過ぎて大正十二年研究科第三学年の暑中休暇に帰郷した時、二三回説教を頼まれて、自分では有難い積りで話したのではあるけれども、私のは机上の空論、畳の上の水練であつて、嘘では無いけれども自分が生かされていないから、真剣に求められた上岡さんや弘中さん達の心弦には触れない、『入信の道程』

に詳しょう悉しつ）、お二人より「あんな有難ありがたいお説教せつきょうばかりでは罪惡ざいあく深重しんじゅうの機きが知らしして戴いたけません。唯ただの唯ただの味あじわいは嬉うれしくなったり、喜よろこばれたりする思おもいではありません。またまだ泣なくに泣なかれない心こころが有あると思おもいます」とのお話はなしに、貫もらえたら嬉うれしく成ならんでどうするか、泣なく心こころが有あればこそお助けたすではないか、と一時いちじに逆の上ぼせる程腹ほどはらも立たつたけれども、今いまから考かんがえて見みれば生死しじゆうの苦海くかいを遠方えんぼうに眺ながめ、御親みおやの念力ねんりきを十萬億土じゅうまんおくどに置おいているから、「貫もらえたら」「有あればこそお助けたすではないか」と不知不識しらずしらずに遠とおい未来みらいで戴いたく他人たにんの信仰しんこうのよう様な考かんがえをしていた事ことが愧はずかしくてならない。

そして「上岡うえおかさんの信仰しんこうは」と訊たずねると、「私わたしは何なにが何なにやら判わかりませんからあの親おや様さまにお問といんされえ」と答こたえられて、五年十年ごねんじゅうねんの勉強べんきょうも不思議ふしぎの仏智ぶつちの前まえには役やくに立たたない。古語こごに「聖教しょうきょう読よみの聖教しょうきょう知らず、聖教しょうきょう読よまずの聖教しょうきょう読よみ」と言う御言葉おことばが有あるが、心こころから有難ありがたうても有難ありがたいものに誤魔化ごまかされている事ことが有あるから注意ちゅういしなければならぬ。訳わけや理屈りくつが判わかり心得こころえたりと澄すましているのは知しつたのであつて信しんじたのではない。聖教しょうきょうの文字もんじは読よめなくても、学問がくもんや智慧ちえで通とおれない関門かんもんを開発かいほつしてこそ本當ほんとうの聖教しょうきょう読よみ

である。前者であつた私が後者であつた上岡さんに打ち砕かれたのは無理もない。あの時よい加減な妥協で済ましたなら私は永遠に救われなかつたらう。今は眞の知識だと合掌している。八月六日に上京し、第一の横槍の痕をお聖教で押さえつつ、嵐山の宿で卒業論文を書き続けていたけれども、母から来た一通の手紙、第二の槍で、平氣を粧う事も出来ず、仏を欺し人を化し自分自身迄も誤魔化していた本性の尻尾を出さずにはいられなかつたのである。(取意の手紙)

本当に他力の信の有る方は尠うございます。今頃の坊さんは一寸聞けば他力によく似ているけれども、奥の奥の方になると、自力の教えのように思われます。こう聞いたのが安心だの、こう信じたのが信心だの、疑い晴れたらよい、信が獲られたら何時思ひ出しても嬉しやの思ひが出る、また懺悔する心も出る、それが起らぬ様では本當の信仰ではないと申されるから、嬉しい時には之でと思ひ、悪い心が出た時には之ではと悔やみ、何時迄たつても若存若亡はやみません。こんな教え方は駄目でございます。小溝をさらえて何処何処迄も詳しく話してお上げなさい。示談に出て来て問われる方は少々の思ひ

立ちではございせんから心の底から親心を述べてお上げなさいよ。真宗は自信教人信
ですから、自分に他力の信仰の無い間は決してお説教などしてはなりません。或書物に
若し僧侶が不浄説法をしたならば追剥よりも未だ悪い、山中で迷うて金銭を追剥に奪わ
れた旅人が里に出る道を教えてくれと頼んだなら、必ず教えるに違いない、然るに僧侶
は取る事ばかり考えて真実の道を教えないから、折角道を求める同行を三悪道の谷底へ
突墮とす様なものである、と書いてありましたが、あなたは如来様の真実が届きました
か。親心が知れましたか。学問も智慧も未来の往生には三文の価値もありません。泣く
に泣かれぬこの心を見貫いて下さった願力の独ばたらきでございます。口の先の只と心
の底よりの唯の叫びとは、聞く人への響きが大いに違いますよ。どうぞ真剣に法の為に
お尽くし下さいませ 云々

私が此の手紙を読み終った時どんな気がしただろう。総ての恐怖が一時に襲うた様に
千尋の谷底へ投げ込まれた様に、総ての希望が裏切られた様に、狂乱怒濤に機関の故障
を起こした様に、取返しが付かない罪惡を犯した様に、沈黙した儘自省せざるを得なかつ

た。私は一体信仰を獲たのでは有るまいか。み仏の勅命に信順したのならまたまた喜ばれなければならぬ筈である。誰が何といつても動かぬ金剛心でなければならぬ筈である。人から言われて気持の悪い様な信仰では他力では無い。此の儘を赦すから他力ではないかと理屈を合わして見るけれども合わない。考えまいとすれば益々考えずにはいられない。払えども払えども、揉み消せども揉み消せども、疑念は募るばかりである。妄雲は覆うばかりである。学問は判っている。聞信の一念に往生は一定と言う理屈も知っている。経釈の文句を取出して、信ずれば助かる、疑えば迷う、明信仏智と疑惑仏智の得失は大経下巻に胎化段として顕れ、龍樹菩薩は是を受けて、「若人種善根、疑則華不開、信心清浄者、華開則見仏」と仰せられ、選択集の三心章を 高祖は受けて正信偈に「還来生死輪転家、決以疑情為所止、速入寂靜無為樂、必以信心為能入」と信疑決判をされたのである。また聖人様は「涅槃真因唯以信心」と仰せられてあるからどうしても信心が無くては往生が出来ない。こんな疑いが出て来るとは 今迄の信心は自分が自分に欺かれていたのだろうか。あれ程慶べもし称名も出ていたのに 今は嬉しくも

有難うも無い。何故真実に御恩が喜べないのだろうか。今迄のは胃散は胃病の薬、目薬は眼の薬と知っていただけで、墮ちる者をお助けと効能だけ知っていて、墮ちた事が無いから助かった事が無かったのだろうか。胸の中は蜂の巣をつついた様に、蜘蛛の子を散らした様に 乱れに乱れて立派な信心の城郭は 二個の爆弾に依つて見事破壊されたのである。

根本から崩され破壊された信仰は、貴重な花瓶に亀裂が入つた位な騒ぎではない。真剣に成れば成る程妄念の焰は燃えるではないか。信念を凝らせば凝らす程乱想の渦は巻くではないか。私は何故こんな心が動くのだろうか。何故真実に成れないのだろうか。俗人から僧侶に成つたのは、人を濟度する為ではないか。私がこんなに狂うてどうして人を導く事が出来よう。嗚呼情けない。此の儘死んだら地獄に墮ちるではないか。進めば進む程暗くなるばかりで学問も理屈もこうなれば更に通用しない。飢えた者は食の善悪を言わない。溺れているものは浮木の支えるか支え得ないかを問う暇はない。命を捨てても真実に導いて下さると見込んで無漏田師を訊ねて教えを請うた。涙を

注いでの慈誨は、一々肺腑に響くけれども耳の底には唸るけれども知って知り抜いてたつた一つ知らない処がある。判つて判つて判り抜いてたつた一つ判らん処が有る。「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫曠劫より已来常に没し常に流転して出離の縁有ること無しと深信す」と三世に亘つて自分には微塵ばかりも眞実はないのです。苦惱を抱えて泣く其の心の為に本願が成就したのであります、と仰せ下さる時には、あの文句は善導大師の散善義の機の深信じやなと思ひ、

「いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」と身動きならぬ悪業に縛られて、決定必定墮ちるのです。聖人様の信仰は墮ちる者じやがお助けと言ふ水際の立たぬ信仰ではありません、どちらの御文も共に、「出離の縁あることなし」、「一定すみかぞかし」そこには間一髪も入らない、自力疑心も雑らない、絶対の悪魔の助かる望みの綱のふつつり切れた極意は言慮の及ぶ処でないと、愈々の瀬戸際まで話されても、きよろんとしてゐる不実の心、而も今の御文は歎異鈔の第二章の中程に在ると、頭は書物の上を自由に走っているけれど、心のドン底は其の儘の味を納得してくれない、

不安な心は更にやまない、日一日と八方が塞がり遂にこの信仰の解決が付かなかつたら卒業は二年三年遅れても後生の一大事には代えられないと論文は其の儘中止してしまつた。

其時の悲壮な思いは今でも戦慄する。何と勇猛な決定だつたらう。私の往生の解決が付かなかつたら一切の衆生はどうするだらう。私が救われた時一切衆生も救われるのである。自信が決定した時真の教人信は動くのである。今迄私は何の夢を見ていたのだらう。宗教を死後の問題とばかり考えていたが、此の苦悩を除いてこそ真の宗教ではないか。現在を救い切らない宗教では死後の往生は当てにならない。

その儘来いとはどの儘か。何処が唯だ。何処に他力が働いているか。こんな心の悶えがあるのに仏様はどうしておられるのだらう。聞かない昔の方がどれだけ気楽なかもしれない。何故御聖教に書かれてある事が信じ切れないのだらうか。疑うだけの価値のない人間と知りつつも疑わずにはいられない私が哀れではないか。何故法の手元がみていられないのか。何故嫌な機を見る様に成つたのだらうか。嗚呼判らない判らない、文字

は判つても親心が判らない。それでは八万の法蔵を知つても一文不知と異ならないではないか。罪悪を見れば見る程底が知れない。一体最後はどうなるのだろうか。念仏を称えながら墮ちねばならないではないか。もう其時には溜息より他には出て来ない。嵐山から本願寺の御真影前に跪いては泣き、大谷に詣でては泣く。世の中は暗黒である、心の中は墨を流した様な気持ちである。総会所の説教は聞いているけれど渴を医するには足らない。寝ても寝られず起きても起きられず、御飯も殆んど味が判らず欲しくもない。家にもおり切らず京都に出て行く。解決が得られなくて泣く泣く帰る。嗚呼聖人様が往生の一大事の解決は付かず、二十九歳を一期として地上を去らねばならぬ聖徳太子の靈告が眼前に迫つて六角堂に御祈願の御心持は今泣いて悶えて法に飢えている私の気持ちと同じであつたに違いない。泣くにも泣かれぬ此の思い、何故真実に成り得ないのだろう。私は仏様と因縁が無いのではあるまいか。今死んだらどうなるのだろうか。一息つがざれば千載に永く逝く、再び人間に生れる事は出来ないではないか。挙げた手が下りなかつたら、踏んだ足が上らなかつたら其儘が地獄ではないか。判らない、判らな

い、何もかも判らない。法も判らなければ機も判らない。どうなつたらお慈悲が戴けるのだらうか。何か要求があるのなら易いけれども、無条件程難しいものは有りはしない。ああ苦しいではないか。南無阿弥陀仏も出やしない。毎日案じ貫いて見るけれども五里霧中である。遂に三国伝来の釈尊の靈像に詣で、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、娑婆往来八千遍、幾生も幾生も衆生済度の為に御苦勞下さつたお釈迦様、今法龍は泣いています。苦惱の心を抱いて求めています。

釈迦弥陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

われらが無上の信心を

発起せしめ給ひけり

と聖人様も仰せられてありますが、拔苦与樂は仏教の根本、破闇満願は六字の妙用、と承りますが、聞けば聞く程考えれば考える程、じつとしてはいられません、八千遍も御苦勞して下さつたのなら、御無理でもございませうが、何卒真実の御仏様に遇わして下さいと清涼寺に二時間ばかりも坐つていたけれども、何の靈告も無ければ反応も無い。唯々有る物は暴風驟雨の心ばかりである。参詣人に心を奪われお道具に眼が付き、一心

に成れば成る程心は走るではないか。右から引き寄せて来れば左へ、左から連れて来れば右へ、東に西に、京都に岩国に、果ては世界中、十方法界に!! 観念も出来なければ修行も出来ない。また京都へ走るけれども自問自答して見れば問うべき事柄は無く、只々煩惱熾盛の心に追い立てられているのである。何故泣かねばならないのか。何故悶えねばならないのか。人の談話にも耳は傾かない。書物に親しむ勇氣もない。總會所で聞いていられるけれども喩話ばかりで真剣味が無い。人にはこんな苦勞はないのだろうか。煩悶は無いのだろうか。思い余つて「信者めぐり」の主人公三田源七氏を訪ねたけれども北海道へ赴かれた留守であった。泣き泣き法蔵に入つて五回も七回も一切経を繰られた法然上人の佛を偲ばずにはいられたなかつた。三経七祖と真宗法要、机の上に並べて泣かずにはいられたなかつた。至心信樂欲生、至誠心深心廻向発願心、一心、憶念、三信、無上信心、二種深信、専修、三心具足、疑蓋無雜、信心を以て本とする。疑うてはいないのに何故底の心が承知しないのだろうか。お聖教は読めても心が読めない。一心専念弥陀名号の文は幾度繰返しても蛙の面に水である。益々心の唸りは

高まるばかりである。近角氏の「歎異鈔の講和」も判っている。今井師の「凡夫そのま
ま」も読んでいる。私の心の働く通りに動いている大慈悲であるから其の儘でよいと
書いてあるのも知っている。何故この心が判らないのか。向うを見れば真暗闇、今を見
れば罪悪深重、後ろをみれば地獄はい出の私ではないか。地団駄踏んでも判らない。
ぎりぎり廻いしても得られない。「其儘が聞こえませーん!!」と口では叫び上の心は
周章ているけれども下の心は鉛の様でぴりつともしない。何故動かんか、何故驚かな
いか、何故真剣に成れないか、嗚呼出離の縁は無いな、思えば思えば胸も張裂けるよ
うである。僧侶に成りながら珍しくも無い無量の苦患を受けなければならぬかと、
全身熱鉄の湯を浴びた様な身慄いをせずにはいられなかつた。
其時不図、無常の虎の絵を思い浮かべた。曠空の原をさまよう一人の男が大きな虎
に追い駆けられて、断崖絶壁で後にも先にも行かれない。松の木に登り枝から更に一本
の葛藤に下がった。下は黒々した底の知れない井戸、三匹の龍は口を開いて待つてい
る。上では喉を鳴らして虎が待つている。白と黒との鼠が交々来ては葛藤を嚙つてい

る。本人は平気で空を眺め、蜂の巣から落ちて来る蜜を嘗めて喜んでゐる。

ああ私はこの絵の通りである。何と危うい芸当ではないか。之が人生の姿ではないか。登れば食われ墮ちれば吞まれる。時々刻々命の綱は昼夜の鼠に嚙られて切れつつあるではないか。それをも知らないで浮世の歡樂に耽り、蜜を嘗めては喜び、地位や名誉を得ては楽しむ。財産を得ては誇り、妻を持つては罪を造る。今切れたら墮ちるではないか。浮世の総てが何になる。死の前には三文の価値も無いではないか。身に行うは邪行邪淫ばかりである。心に思うは三毒五欲の煩惱ばかりである。法龍一日の中に八億四千の念がある。念々の中に為す所は皆三塗の業である。

無明煩惱しげくして

塵数のごとく遍満す

愛憎違順することは

高峯岳山にことならず

と、罪は山程荷うてゐるではないか。恐ろしい業は欠け目なく具足してゐるではないか。立っていても坐っていても墮ちる。走っていても寝ていても墮ちる。喜んででも楽しんででも墮ちる。泣いても笑うても墮ちる。学者も智者も賢者も愚者も平等に墮ちるのだ。

嗚呼法を聞きながら、礼拝しながら、口に称名稱えながら、ぎりぎり舞いをしながら墮ちるのだ。(殆んど夢中) ああ危ない、噫!!危ない、どうにもこうにも成れないではないか。ああ私はどうしよう。泣いても叫んでも墮ちるより他には道は無いのだ。地獄は一定!! と底から噴き上げたその恐ろしさ!! 同時に命の綱は切落され、黒い焰の燃え上がる、無間のどん底に投込まれ、「わー」と唸る法龍の声が先か、「唯ぞー」の声なき声がか先か。

浮かぶ瀬が無いから唯で救うのだぞ。罪の有りたけ無条件で引受ける親は五年や十年前じゃない。十劫の昔から立ちづめに待っているのだぞ。五劫の間考えていたその時にお前の一念一刹那に起る心の有りたけを見抜いて、悪い心より他に起らぬ心と知っているから悪人を悪人のまんまで救う方法が出来ているのだぞ。どうにもこうにも成れない始末のつかない心であればこそ、本形の儘をはたらかさずして生まるべからざる者をうまれさせたらばこそ私の手柄ではないか。どうか私に任しておくれ!! 嗚呼親様!! と叫んだ時には言亡慮絶の不思議の靈感、法龍一切の無明の闇は晴れ、法龍一切の志願は

満足され、善も欲しからず悪も恐れなし。この儘かこの儘か、動きのとれない此の儘が
其の儘来いよの正客であったのかと跳び上り踊り舞いして慶んだ。私の毎日毎夜行うて
いる逆謗の心こそ十八願に契うていた心であったのか。善い心に成つて行くのではなかつ
た、善く成り切れない心を赦されて帰る親里であった。信心戴いて安心戴いてと力んで
行くお浄土ではなかつた。安心も信心も戴き切らない私を無条件で赦して下さった事を
安心して帰るのであった。ああ墮ちるも上がるも知り切らない不実一杯が正客とは不
議な親様であったなあ、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、法龍称念必得往生、私は親様の
一人子であったのか。親を親とも知らないで、何とか成ろうと求めて見たが、成れない
儘が成れたとは仏智の不思議でございます。こんなに見易い唯でいいのだろうか。開い
た口の閉がらない程易い唯とは知らなんだ。唯の言葉もいらぬ唯である。私の儘が南
無阿弥陀仏、始末の付かない渦巻きが真実功德大宝海とは愧しいやら嬉しいやら。煩惱
に底が知れないから真実の智慧の高さが知れない。散乱粗動に果てしが無いから無辺の
宝海に限りが無い。南無阿弥陀仏、阿弥陀仏、平生業成の宗旨と聞きながら死後の往生

を夢見ていたが、肉体の往生を考えていたが、現生不退を知らなんだ。即得往生を知らなんだ。親様赦して下さい。お釈迦様もお許して下さい。私の悪魔の心を柵に置いて、他力が何処にあるか、唯が何処にあるか、娑婆往来八千遍なら一度なりとも私の為にと親に熱湯を浴びせ お釈迦様を怨んでいましたが、八千遍の御苦労もこの極難の信を得させんが為に私一人に働いていて下さったのであったのに!! 諸苦毒中我行精進忍終不悔の念力は私の狂乱怒濤を心多歡喜と転ぜしめずば置かないと言う御親の生血であったのか!!

釈迦弥陀は慈悲の父母 諸々に善巧方便し

法龍の無上の信心を 発起せしめ給ひけり

嗚呼仏恩は深遠である。釈尊の鴻恩は謝し難い。私の血汐の唸りこそ南無阿弥陀仏の唸りである。私の動く其儘が六字其の儘の活動である。機法一体、仏凡一体、絶対不二の此の境地、踊躍歡喜せずにいられない。この嬉しさの余りには、法の為に討死しなければならぬ。身心共に破れる迄叫び続けずにはいられない。現在に生きよ現在に。

現在げんざいに醒さめよ現在げんざいに。現在げんざいに救すくわれ切きらない者ものは未来みらいは当あてに成ならない。現在げんざいに満足まんぞくし切きらない者ものは未来みらいの満足まんぞくなぞ当あてにならない。現在げんざいに解決かいけつしない信仰しんこうでは未来みらいの往生おうじょうは不定ふじょうであるぞ。

信受本願前念命終しんじゆほんがんぜんねんみんじゆう

即得往生後念即生そくとくおうじょうごねんそくじゆう

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ

令和元年七月 発行

発行所 親鸞聖人と

大沼和上に学ぶ会

〒933-0007 高岡市角字板鳥五四三一二